

Sherwood Anderson の描く女性にとっての子供の存在

——*Winesburg, Ohio* の Louise Bentley の場合——

Children in the Lives of Women in Sherwood Anderson's Stories

——Louise Bentley's Story in *Winesburg, Ohio*——

Misaki Kitajima

北島 美咲

要 旨

Winesburg, Ohio (1919) には作者 Sherwood Anderson の言うグロテスクな人々が多く登場する。彼らの大半は家族が揃っておらず、孫と祖母だったり、息子と父親、あるいは独り身だったりする。そのような中、*Winesburg* の“Godliness”に登場する Louise Bentley は他のグロテスクな人々とは異なり、銀行家の夫 John Hardy と息子 David という家族、そしてお金に苦労しない生活を手にしている。だが、それでも彼女は孤独から脱することはできない。Louise はなぜこういった生活をしながらも孤独なままなののだろうか。Louise は息子 David を祖父に預けて手放してしまうのだが、*Winesburg* でこういったことをする登場人物は他にはいない。一方、Anderson の最初に出版された *Windy McPherson's Son* (1916, 1922) では、2章を使って主人公 Sam McPherson の妻 Sue が3度妊娠しながら出産に至らず苦しみ、最終的に夫の連れ帰った養子を受け入れる姿が描かれている。これらのことから、Anderson の描く女性には子供の存在が大きな影響を与えているのではないかと考えた。そこで本小論では、まず Anderson が女性や子供をどのように考えているのかを再考し、次に *Windy McPherson's Son* の Sue McPherson にとって子供はどういう意味を持つのかを考察する。さらにこれらを踏まえて、*Winesburg* の Louise Bentley にとっての子供とは何か、また彼女がなぜ孤独に陥ったのかを検証する。そうすることで、子供の存在を含めた Sherwood Anderson の考えが Louise Bentley の孤独な状況とどのように関わ

っているのが明らかになるだろう。

キーワード：女性、子供、孤独

1. はじめに

Sherwood Anderson は彼の考えるグロテスクな人々を多く描いている。特に *Winesburg, Ohio* (1919) では、多くのグロテスクな人物が登場する。Anderson が描くグロテスクな人々とは、*Winesburg* において “It was the truths that made the people grotesques. . . . the moment one of the people took one of the truths to himself, called it his truth, and tried to live his life by it, he became a grotesque . . .” (3-4)¹ とあり、自分の信じるものに捕らわれてしまい、他人や他の考えを受け入れることができず孤独に陥っている人々、といった定義づけがほぼ同様に多くの批評家² によってなされている。

Winesburg には上で述べたように多くのグロテスクな人物が登場するが、David Stouk が “There are no whole families in the book suggesting complete or fulfilled relationships . . .” (43) と述べるように、彼らの家族構成は孫と祖母だけだったり、息子と父親のみ、もしくは、独身だったりすることが多い。しかし、すべての登場人物がそういった家庭環境にいるわけではない。*Winesburg* の “Godliness” に登場する Louise Bentley は、銀行家の夫 John Hardy と息子 David がいて、いわば家族が揃っている状態で生活しており経済的な問題もない。だが夫との関係はうまくいっておらず、子供の世話もままならず、最後には息子を彼女の父親に預けて手放してしまう。Louise は他のグロテスクな人々とは異なり、恵まれた環境にありながら結局孤独に陥ってしまっている。それはなぜだろうか。

Winesburg における家族や結婚については、Edwin T. Bowden が “The ordinary concept of love leading to marriage and family and mutual trust and affection is a lie for Winesburg, leading men and women into betrayal and pain and greater isolation.” (121) と述べている。Bowden の考えでは、夫や息子の存在が結果的に Louise を孤独へと導いてしまうことになる。この彼女の状況をどうとらえればよいだろうか。そこで今回は子供に注目して Louise の孤独の原因を探ってみようと思う。それはまず1点目に子供がなんらかの大きな影響を Louise にもたらしているようであること、そして2点目に子供に対して Anderson の強い思いがあるかもしれないと考えたためだ。

詳しく述べると、1点目については Louise が息子 David を自分の父親 Jesse に預けて手放してしまうという、*Winesburg* の他の登場人物がしないような行動を起こすためである。“Mother”、“Death”の Elizabeth Willard のように息子に親密さを強く感じていたり、“The Philosopher”の Dr. Parcival の母親のように、うまく表現できずとも何らかの愛情を示し続けている女性たちの中では Louise は特異である。Louise のこういった行動から、Anderson は子供に対して彼女には他に登場する人々とは違った意味合いを持たせているのかもしれないと考えた。また2点目については、Anderson は最初に出版した作品 *Windy McPherson's Son* (1916, 1922) で、Sue McPherson という女性が3度妊娠しながらも出産にいたらず子供のことで悩み苦しみ、最終的には養子を迎えるという内容を2章使って描いており、Anderson には子どもに対して何らかの強い思いがあるのではないかと考えたためである。

そこで本小論では、まず Anderson の女性観や子供観を再考し、これを踏まえて Anderson の考えがおそらく色濃く出ているだろう最初の長編小説 *Windy McPherson's Son* の Sue McPherson の子供についてのとらえ方を考察する。その上で *Winesburg, Ohio* の Louise Bentley にとって子供がどういう意味を持つのか、そして彼女が孤独から脱することができない理由を検証する。

2. Anderson の描く女性と子供

まず初めに、Anderson は女性と子供をどのようにとらえて作品を描いているのかを見ていこう。彼は女性には男女間の関係を構築する責任がかかっていると考えているようだ。Bunge が次のように述べている。“... since all that remains of that happier, earlier time is that women give birth, the responsibility for re-establishing harmonious relationships between the sexes rests with women.” (242) と、Anderson が男女間の関係を築く際に責任を担うのは女性の役割であると結論づけており、“Anderson urges women to reverence the nurturing impulses they retain rather than capitulate to the way of life which has already injured so many men; . . .” (243) と女性が子を養うことに対して Anderson が敬いの念をいだいているとしている。また Bunge は *Memoir* (1942) から次の部分を参照している。

Childbirth ties women to instincts men have lost touch with; . . . an old woman may

carry about a wornout body, may walk with difficulty, her body may be wracked with pain, but a beautiful aliveness still shines out of her old eyes and it may be because women are less defeated by modern life . . . They have been creators. Children have been born out of their bodies.” (*Memoirs*, 58), (Bunge, 242) (下線は筆者)

Memoirs で Anderson は、女性は子供を産むことによって現代の生活によって打ちまかされることなく、美しく生きることができるという考えを述べていると続けているのだ。

また William V. Miller は、Anderson は特に短編において女性を豊かな表現力と女性に対する狭い考えに基づいて描いているとし、“For the most part, his female characters are managers, defenders of the home who entrap men, wholehearted givers to men, frustrated gropers after a higher life, or characters in whom these qualities are combined.” (203) と結論づけている。Anderson にとって女性は、家を守り男性に何かを与え続ける存在であるということだ。

このように見てくると Anderson は概ね次のように考えていることが分かる。すなわち女性は子供を養うべきであり、そして、その子供によって女性は美しく生きることができ、男性が忘れつつある生の創造という本能を維持することができるというのだ。彼の描く女性や子供は、こういった思いを反映して、男女の関係を保つ重要な役割を果たす存在として描かれる傾向にあるだろう。³

ここから Anderson の考えを踏まえつつ、Sue や Louise がそれぞれどのように子供をとらえているかを見てみよう。

3. Sue MacPherson にとっての子供

Windy McPherson's Son は Anderson の最初の長編小説ということもあり、主人公である Sam の妻 Sue やその子供には、先に述べた Anderson の考える女性や子供の存在意義が色濃く反映されている可能性が高い。Sue が結婚について Sam と話している場面を見てみよう。⁴

Her [Sue's] idea was one of service to mankind through children. . . . She had thought it all out and had tried to plan for herself a life with other ends, and wanted a

husband in accord with her ideas. . . . “I can find a man who I can control and who will believe as I believe. My money gives me that power. But I want him to be a real man, a man of ability, a man who does things for himself, one fitted by his life and his achievements to be the father of children who do things. . . .” (188) (下線は筆者)

この場面で Sue は子供を通じて人に貢献したいので結婚をするのであり、夫は子供の父親になれる人でなければいけないと語っている。また Sue は次のように続ける。

I want to give birth my wealth and your ability to children — our children. That will not be easy for you. . . . You will have to furnish that. You will have to make a mother of me and keep making a mother of me. You will have to be a new kind of father with something maternal in you. . . . You will have to think of these things at night instead of thinking of your own advancement . . . (189) (下線は筆者)

Sue は母親になること、Sam には自分たちの子供の父親になることを強く求める。彼女の場合、子供がいて初めて成り立つ結婚であり、子供が結婚の第一の目的だということがわかる。

ということは、子供を得ることがなければ当然夫婦の関係は続けられない。この夫婦には子供が生まれることはない。すると夫 Sam は次のように思い始める。

At bottom, his mind did not run strongly toward the idea of the love of women as an end in life; he had loved, and did love, Sue with something approaching religious fervour, but the fervour was more than half due to the ideas she had given him and to the fact that with him she was to have been the instrument for the realization of those ideas. (221-22) (下線は筆者)

Sam は Sue が与えてくれた考えに対する熱情があってこそ彼女を愛して結婚した。だがなかなか子供を得られない状況で、Sam は彼女自身を愛していたのか、彼女の考えを愛していたのかよくわからなくなる。

一方 Sue は、“. . . [Sue] talked of the beauties of a life devoted to social service.

‘. . . We must together give the best in our lives and our fortunes to mankind. We must make ourselves units in the great modern movements for social uplift.’” (225) とあるように、子供が担うはずだった社会に対する役割を自分と Sam とで代わりに行き、彼女の考える夫婦や結婚の形を保とうとする。そして Sam をその活動にうまく巻き込めなかったとき彼女は次のように言う。“I have not been brave, . . . I am standing in your way. . . . I should have freed you but I hadn’t the courage, . . . I could not give up the dream that some day you would really take me back to you.” (242) この解放してあげる勇気がなかったという言葉には、夫を手放したくなく引き留めておきたいという Sue の強い思いがよく表れている。だが Sue の思いとはうらはらに Sam は放浪の旅に出てしまい、いったんこの夫婦は離れてしまう。やはり夫婦の関係は子供がいなくてうまくいかなくなってしまうのだ。

ところがその後、物語の終盤で Sam は養子として3人の子供を連れて戻ってくる。放浪中の身であり養子に関して Sue に了承を得ているはずはなく、半ば強引な展開である。それでも彼女は最終的に彼の希望どおり子供たちを受け入れる。⁵これにより Sue は Sam との関係が続けることができ子供も得て、ついに家族という形を作ることになるのだ。

このような二人の関係から、Sue にとっての子供とは結婚の第一の目的であり、夫との関係維持に必要な存在であることは明白である。上にあげたように、Sue が子供の代わりを担ってでも夫婦の関係を維持しようする思いや、物語の最後に Sam が連れてきた養子を受け入れることを考えると、Sue McPherson は Anderson の考える女性や子供の役割を担っており、男女間のあるべき関係をつなぎ留める重要な鍵であることがわかる。⁶

4. Louise Bentley にとっての子供

では Louise Bentley にとっての子供の存在はどのようなものだろうか。まず彼女は Sue とは違い結婚を望んではいなかった。彼女の結婚については次のように描かれている。“When the alarm that had tricked them into marriage proved to be groundless, she was angry and said bitter, hurtful things. Later when her son David was born, she could not nurse him and did not know whether she wanted him or not.” (73) 彼女は妊娠したと勘違いして結婚を決めたのだ。だが妊娠していなかった事実がわかると怒りを表し、そ

の後生まれた子供 David に対しても望んだ子なのかどうかもわからず母親らしいふるまいができない。David が母 Louise のふるまいを見ておびえ、母と父のいる家に帰りたくないと思うほどだ。つまり Louise は子供を望んでいたわけではない。Sue とは求めるものが違っており、Anderson が考える男女間の関係をつなぐ役割をするような女性の姿とも違っているのである。

では Louise は何を求めているのか。それは次の言葉に集約される。彼女が結婚する前に夫となる John Hardy に宛てた手紙に書いた “I want someone to love me and I want to love someone” (71) という言葉だ。この言葉の背景にあるのは、彼女の孤独な生い立ちである。彼女は女性であるために父親から愛情を受けることなく育った。なぜなら彼女の父親 Jesse Bentley は男の子供が欲しかったのである。また母親 Katherine も彼女を産んですぐに亡くなっており、Louise は父親のみならず母親からも愛されたことがなかったと思っている。それゆえ、他人を愛する方法もわからないのだろう。Louise は少女時代に学校へ行くために町の Hardy 家で暮らしはじめたとき、父のいる Bentley 農場を出ることで友情や愛情を得られるかもしれないと希望を抱くが、周りの人との付き合い方がわからず Hardy 家の中でも孤立してしまう。また彼女はのちに夫となる John Hardy と近づきたいと思うのだが、それは単に彼だけが Hardy 家の中で彼女にそっけない態度をとらなかったからだ。Louise は愛され方も愛し方もわからない、そのために彼女は子供の愛し方はおろか子供を望んでいるか否かもわからなくなってしまった。彼女は夫婦や家族そして子供を求めるといよりも、自分を愛してほしい、そして、誰かを愛したいという強い思いを抱いているのである。

だが子供が生まれたのなら自分が愛されなかった分、曲がりなりにもその子供に愛情を注いでやればよいのではないかと、また、子供が生まれたことで母性に目覚め自然とその子供をかわいがりようになるのではないかと、と思われるがそうはならなかった。それは子供が男の子だったことが原因ではないかと考えられる。Marilyn Judith Atlas は Anderson が *Winesburg* で描く女性はみな男性と同じような決定したり選択したりする能力を与えられていないと指摘しており、Louise については次のように述べている。

Her unhappiness does not cause her to reconsider the practicality of love as life's cen-

tral solution. Instead it leads her to be an angry, ineffectual woman, and a hater of men. Interestingly, she does not reject woman; for her they remain fellow victims, but she rejects all men and this anger negatively affects her relationship with her son whom she treats ambivalently. (259)

Louise は自分と同じ女性を拒絶しないが、男性は受け入れられない。だが彼女は男の子を授かったので、“... she is given no opportunity to satisfy either her need to love or her need to be loved.” (259) と続けている。Louise は男の子の David が生まれたことで、愛する気持ちも愛される気持ちも満足させられることはないというのだ。

夫との不和や父親からの冷遇によって Louise が男性に対して不信感を抱いている可能性は高い。また彼女が Hardy 家の娘たちと初めは仲良くなりたいと願っていたり、すべてのものが嫌いだと言いながら “I hate father and old man Hardy too” (72) と男性である父やその友人である Albert Hardy をはっきり指して言ったり、農場から迎えに来た若い農夫を邪険に扱ったりすることを考えると、Louise は女性を拒絶することはないが男性は受け入れられないことは明らかだろう。

また Louise は子供の性別をはっきりと意識している。彼女が息子 David を手放すときに父 Jesse に次のように言う。“It is a place for a man child, although it was never a place for me, ... You never wanted me there and of course the air of your house did me no good. It was like poison in my blood but it will be different with him.” (55) Bentley 農場は男の子の場所であり、女の子の自分がいられる場所ではなかったと言う。Louise は David を前に子供の頃を思い出し、自分が女の子だったから父親に必要とされなかったのだという思いにとらわれてしまう。また夫の John が Louise が子供の世話をしないことを責めると、“It is a man child and will get what it wants anyway, ... Had it been a woman child there is nothing in the wood I would not have done for it.” (74) と Louise は子供が女の子だったなら良かったのにという思いを込めて言う。彼女ははっきりと子供の性別を意識して、男の子供は受け入れることができない、自分と同じ女の子供が欲しいと意思表示をしているのだ。

先に Atlas が “... she is given no opportunity to satisfy either her need to love or her need to be loved.” と述べていたことは、もし Louise が女の子さえ授かっていれば、彼女が愛する、そして愛されるチャンスを得る可能性があったとすることもできる。

つまり Louise が女の子を愛することは、愛してもらえなかった我が身を自分で愛することであり、そして自らが愛される経験をするとということだ。そう考えると、Louise にとって子供は愛する対象、かつ愛されるための己の分身の役割を担うことになる。彼女なりに David に対して何らかの強い思いを抱いていたことは、David が Bentley 農場に引き取られたあと、Louise が夫と争う気持ちもなくなり騒ぎを起さなくなる様子などからうかがえる。また David の誘拐騒ぎの際には家に戻った彼を Louise は抱きしめ優しい表情を見せており、彼女に息子を愛そうという気持ちはあったようだ。だが Louise は最終的に男の子である David を受け入れることができない。となると David が彼女の分身としてうまく役割を果たすこともできなくなる。やがて Louise は愛したいが愛することができず、そして愛してもらう経験もできない、というジレンマで身動きできない状態に陥ってしまうのである。

だが Louise の誰かを愛して誰かに愛されたいという願いはもちろん夫 John にも向けられていた。それが彼によって彼女の満足のいくように受け止められていれば、また状況は変わったかもしれない。しかしこの夫婦の間でうまく思いが通じ合っているとは言えなかった。結婚当初の様子が次のように描かれている。

All during the first year Louise tried to make her husband understand the vague and intangible hunger that had led to the writing of the note and that was still unsatisfied. . . . Filled with his own notions of love between men and women, he did not listen but began to kiss her upon the lips. That confused her so that in the end she did not want to be kissed. She did not know what she wanted. (73)

Louise 自身よくわからない漠然とした思いが夫の John に伝わるはずがない。John も彼なりに妻を愛そうとしているだろうが、Louise は彼を受け入れることができない。John は銀行家として成功し町での人望もある。いわば *Winesburg* の女性たちに与えられてないものを持っており、Louise が受け入れられない典型的な男性である。結婚当初はなんとか思いを伝えようとするが、Louise は最終的に夫との関係を築くことをあきらめてしまう。これでは彼女がさらにもう一人の子供を望む気持ちになれないだろう。結局、彼女にとって息子 David が、愛し愛される対象としての自分の分身の役割を果たすはずの最後の望みだったのである。

5. まとめ

これまで述べてきたように、Sue McPhersonにとって子供は、結婚の目的であり男女間の関係や家族の維持に不可欠な存在である。一方 Louise Bentleyにとって子供は、愛し愛される自らの分身になるはずの存在である。また Anderson の考える女性や子供という観点からは、Sue は男女の関係における女性の重要性和子供の必要性をわきまえた、いわば Anderson の考えに適った女性である。一方 Louise はというと、あいまいではあるが夫に対して手紙で思いを伝えるなど作者の考える女性の役割を果たそうとはするが、子供時代の不幸な体験などから息子を愛せず、己も愛されたいという強い思いに支配され、Anderson の考えとは異なる子供観を持つ女性として描かれている。*Winesburg, Ohio* では献辞⁷の言葉にあるように、Anderson はさまざまな人生の表面に見えるものではなく隠れているものを見ようとしており、いろいろな価値観を抱く登場人物が描かれるのは自然なことともいえる。

では Louise Bentley が夫や子供がいて、経済的に恵まれながらも孤独なままなのはなぜだろうか。Louise は夫や子供といった Anderson の求める女性が維持すべきだと考えるものを配されているにもかかわらず、それらと向き合おうとはしない。彼女には “I want someone to love me and I want to love someone” という強い思いがあるため、彼女の分身になれない男の子を愛することはできない。いわば子供の存在が Louise をさらに身動きできない孤独な状態にし、Anderson の思う女性像から遠ざけてしまう要因だったのだ。Louise のこういった状況を考えると、Bowden が “The ordinary concept of love leading to marriage and family and mutual trust and affection is a lie for Winesburg, leading men and women into betrayal and pain and greater isolation.” と述べていたように、“the ordinary concept of love leading to marriage and family” いわば Anderson の女性に対する考えそのものが、皮肉にも Louise を孤独へと導いてしまったということに他ならない。すなわち、Anderson の女性や子供に対する考え、そして Sue と Louise にとっての子供とは何かを検証することで、Louise が家族や男女の関係を維持するためではなく、自分のために子供を求めたために孤独から脱することができないことが明らかになる。つまり、Louise Bentley は Sherwood Anderson の求める女性像ではなかった、そのことが彼女を孤独へ導いたことになるのだ。

注

- 1 引用は Sherwood Anderson. *Sherwood Anderson's Winesburg, Ohio with Variant Readings and Annotations*. (Athens: Ohio UP, 1997) を用いた。
- 2 Edwin T. Bowden は次のように述べている

Sherwood Anderson's *Winesburg, Ohio*, as a representative example of the new novel, is a collection of interrelated sketches of isolated and lonely people in a small commonplace Ohio town, but people suffering a loneliness . . . (114)

また Ray Lewis White は “[Wall is] one of Anderson's recurring images of human anomie” (67) として、孤独を象徴する壁や、壁に囲まれて部屋が作品を通して描かれていることを指摘している。いわば、愛情や理解を求めながらも、社会から疎外され、精神的に隠遁者となってしまった人々がさまよっているわけだ (Burbank 72)。その他に代表的な Anderson の批評家として、Irving Howe や Malcolm Cowley らがいる。

- 3 *Winesburg, Ohio* で Anderson は、自分の力で生きていこうとする、いわば現代的な考えを持つ女性を描いている。例えば、“Adventure” の Alice Hindman は恋人が町を出ていく際に、自分もついていきたいと言い、さらに結婚しなくても良いし恋人の出世の邪魔にならないように自分も働くと言う。その後 *Winesburg* に残った彼女は、衣料品店で働き自らお金を稼いで暮らしている。また本論で取り上げた Louise も教育を受け、理由はともかく熱心に学ぼうとしており、Hardy 家の娘たちが全く勉強に興味がないことと対照的に描かれている。だが “Adventure” に “. . . for all of her willingness to support herself could not have understood the growing modern idea of a woman's owing herself and giving and taking for her own ends in life.” (92) とあるように、Alice も Louise も自分の行っていることが理解できず、結局孤独にさいなまれて幸せにはなれない。*Winesburg, Ohio* で Anderson はさまざまな思いを抱く女性を描いているのだが、彼自身の持つ女性に対する価値観は簡単にはぬぐえないのだろう。
- 4 引用は Sherwood Anderson. *Windy McPherson's Son*. (Urbana, IL: U of Illinois P, 1993) を用いた。

- 5 *Windy McPherson's Son* は1916年に出版され、その後1922年に改訂されて再出版された。主に Book 4 に変更を加えているが、Sue が養子を受け入れる結末は変更されていない。
- 6 *Windy McPherson's Son* では他にも Sue と Sam のように、子供のいない夫婦がいる。Sam が子供の頃から慕う John Telfer とその妻 Eleanor である。Eleanor は婦人帽製造の仕事で成功しているのだが、夫 John は彼女の仕事について “Without the millinery business she [Eleanor] would be a purposeless fool intent upon clothes and with it she is all a woman should be. It is like a child to her.” (77) という場面があり、妻にとっては子供の代わりに仕事があるといった具合に話している。この夫婦のことを作品中では、“They were the most successful married pair in Caxton, and after years of life together they were still in love; . . .” (11) とあり、うまくいっている夫婦として描かれている。だが先に上げた夫 John の仕事に関する言葉を聞いている Eleanor の様子は、“Eleanor, who had turned to laugh at her husband, looked instead at the ground and a shadow crossed her face.” (78) と、彼女の思いが単純に仕事イコール子供でないであろうことはうかがえる。また John の様子が次のように続けられている。

He knew that the suggestion regarding a child had touched a secret regret in Eleanor, and began trying to efface the shadow on her face by throwing himself into the subject that chanced to be on his tongue, making the words roll and tumble from his lips. (78)

John にとっても子供に関して触れてはいけないことだという思いがある。Eleanor も Sue と同様に半ば強引に Anderson の求める女性像にあてはめられているといえるだろう。

- 7 *Wineburg, Ohio* の献辞をあげておく。“To the memory of my mother EMMA SMITH ANDERSON Whose keen observations on the life about her first awoke in me the hunger to see beneath the surface of lives, this book is dedicated.”

参考・引用文献

- Anderson, David D., ed. *Critical Essays on Sherwood Anderson*. Boston: Hall, 1981.
- Anderson, Sherwood. *Sherwood Anderson's Winesburg, Ohio with Variant Reading and Annotations*. Ed. Ray Lewis White. Athens: Ohio UP, 1997.
- . *Sherwood Anderson's Memoirs: Critical Edition*. Ed. Ray Lewis White. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1969.
- . *Windy McPherson's Son*. Urbana, IL: U of Illinois P, 1993.
- Atlas, Marilyn Judith. "Sherwood Anderson and the Women of *Winesburg*." Anderson, *Critical* 250-66.
- Bowden, Edwin T. *The Dungeon of the Heart: Human Isolation and the American Novel*. New York: Macmillan, 1961.
- Bunge, Nancy. "Women in Sherwood Anderson's Fiction." Anderson, *Critical* 242-49.
- Burbank, Rex. *Sherwood Anderson*. New York: Twayne, 1964.
- Cowley, Malcolm. Introduction. *Winesburg, Ohio*. By Sherwood Anderson. Ed. Malcolm Cowley. New York: Viking, 1960. 1-15.
- Howe, Irving. *Sherwood Anderson*. London: Methuen, 1951.
- Miller, William V. "Earth-Mothers, Succubi, and Other Ectoplasmic Spirits: The Women in Sherwood Anderson's Short Stories." *MidAmerica I* (1974): 64-81. Rpt in Anderson, *Critical* 196-209.
- Stouck, David. "Anderson's Expressionist Art." *New Essays on Winesburg, Ohio*. Ed. John W. Crowley. Cambridge: Cambridge UP, 1990. 27-51.
- White, Ray Lewis. "*Winesburg, Ohio*": *An Exploration*. Boston: Twayne, 1990.

